



息子への「ひとこと」

(財) 地方公務員等ライフプラン協会 行田 次男

こ

の春から、勤務場所が青山の地になった。そして昼休みによく神宮外苑を散歩するようになった。

春の銀杏並木は、銚子を天空にスーと伸ばすような感じの山銚行列の態であった。夏の銀杏並木は豊かな葉を腰にまといドッシリとした感じの山銚行列の態であり、秋は、色づきお祭り装いの山銚行列の態となった。そして山銚行列のような銀杏並木、森の中の「御観兵榎碑」、絵画館等、武蔵野の面影を残す森を巡ると、無性に亡き親父を思い出す。

親父が亡くなり、かれこれ20数年が経った。親父は畑仕事の手を休め、兵隊で過ごした東京の話をよくしてくれた。親父の兵役は、東京の近衛騎兵であったらしい。

二重橋、赤坂御所で衛兵に立った。遠くに見た「白馬に乗った陛下」は美しかった、と話す親父は自慢げであった。上官の屋敷が青山にあり、そこで軍馬の世話をし、上官の乗馬訓練の供をして、よく「青山」に出かけた。「青山」は、代々木練兵場に行く途中にあり、よい屋敷街だ、とも話していた。

また「青山通り」は、非常時に陛下を松代へお連れする為に作られた「滑走路」だとか、親父の兵隊の時の話の随所に「青山」という地名が出ていたことを、今、思い出す。

そんな親父が、社会人となる前の私に向かい、「人が一人前になるとは、他人の邪魔にならないこと、これも1つだ」とボソッとやってくれたことがあった。父が言ったこの「ひとこと」が私の心に今も生き続けている。銚子を天空にスーと伸ばすように伸びる唐松林に囲まれた晩秋の桑畑でのことであったと思う。

親父は、社会に出ることに不安でどうしようもなくなっている私に、社会に出る指針としての「ひとこと」をやってくれたのだとそのとき思った。



提供：長野県東京観光情報センター

親父が若い頃過ごした思い出の地「青山」に私はいま、子を持つ親となり、勤めている。親父が亡くなった翌々年に生まれた息子が、今春、社会人となる。この子は小学校入学時に鉄棒から落ち、腕を骨折し入院をしたが、その後は何事もなく順調に成長してくれた。

自分の息子を社会に送り出す年齢となり、自分は果たして親父と同じ様になっているであろうか、息子が社会人となるのにあたり、親父が私に言ってくれたような、心に残る「ひとこと」を贈ることができるか、今、思い悩んでいる。

いま、神宮外苑の銀杏並木は、枯れ山銚行列の様な姿をしている。